

●黒田清輝畫伯の談片(上)

東京に於ける洋畫の泰斗黒田清輝氏大阪より歸東の途次京都に遊ぶと聞き、即ち旅館松吉に訪ふ、氏偶々病を得客を謝して褥に在り、爲めに面晤を得ず、超^レ返^レて一日書を寄せて曰く「病痾稍輕快に赴けるを以て今日(廿二日)東京に歸らんとす、出發前來談あれ」と乃ち之いて談る、行李勿々の間、問はんと欲する事の十ヶ一をだも聽くを得ず、歸來纔に其斷片を綴叙して左の一篇を得たり、或は悞る記憶の誤りあらんことを、豫じめ記して筆責を負ふと云爾(井手蕉雨)

今度の博覽會の洋畫ですか、世評は兎に角^{わたし}子の見たところでは、慥かに前の時よりはヨク揃つて居たヨーです、一体アーいふものを奨勵するには、ドツチかといへばマー讚めた方がイ、かと思はれます、アマリ貶すのは策の得たるものではありますまい、予は學校(東京美術學校)で百名ばかりの生徒を預つて居ますが、最初はビシ／＼鞭撻を加へて、片ツ端から貶して試たがドーもソレが爲めに奮勵して大いにヤローといふものは先づない、ソコデ今度は成るべく叱言^{ちごん}を言はぬヨーにして讚めながら奨勵する方針を採つて見た、ところが其方が好結果で、生徒が乗氣になつて勉強する、人間は感情の動物とはいひながら妙なものだと思ふのです、尤も佛蘭西などの學校では決して生徒の作物を讚めない、頭から貶しつける、ですからタマサカ「可なり」な出來だともいはれると生徒は鬼の首でも取つたヨーな氣になる、此「可なり」も一ヶ月即ち四週間に先づ一人位なものです今度の裸體畫中の傑作ですか、サヨーサ和田英作氏の「こだま」と岡田三郎助氏の「讀書」の二点でせう、何れも苦心の作らしいです、イヤ裸

体畫もコレまで随分兎角の議論がありました子、ドーいふものか予が裸体畫を描くと必ず八ヶましい問題に撞見す、ドーいふ運命かは知れませんが、其度驚いて居るヨ一な次第で、ナゼだかサツバリ義が分らないのです、早い話しが予が眞面目な顔をして往來を歩るいて居るところを、突然に横ずッぽを撲やされたソコデもツてナゼ打ぐツたのだと聞くと汝のヨ一な禿頭をムキ出しにして歩くといふことがあるか不埒千萬な奴だ、と叱られたヨ一なもんですよアハ、、、、何しろ此方では思掛ぬ事なので、ツマリ裸体畫は或高尚な理想を哲學的に解剖して一ツの畫を成立した義なのですからナ、元來畫には風景動物器具其他種々雑多なものがありますが、最も眼目とすべきものは人物です、で人物としては、歴史畫などは別問題として單に「人」といふものを完全に描コーとする場合には是非裸躰によるのが得策です、ナゼといふには「服裝」といふものはドーしても「時代」を明かにするもので「時代」といふことを離れて服裝を描コーといふのは到底不可能の事です、と同時に「人種」といふ上にも關係します、日本人から見れば白哲人種は妙に色の白い人間で、印度人種は又イヤに色の黎い人間で共に異人種であるといふ觀念があるのですから單に「人物」といふ頭腦で見ることが出来ぬ習慣になつて居る、ソコデ今いふ單に「人物」といふ場合には無論日本人を指すので、裸躰畫は即ち時代に關係することなしに、直ちに「人」其ものを描き出したものなのです。

『京都日出新聞』明治三六年七月二四日